

問題

次の文章を読み、あとの問に答えよ。

(50点)

チェック

1 昔、仏法求むる*道人有りけり。ある山の中を行くに、二人の山がつ、一人は畠はたけを作るあり。父子なるaべし。これを

見れば、その子、毒蛇のために刺されて俄はなかに死xにけり。父、歎なげく気色なくて、この道人に語りて云はく、「そのおはする道のほとりに家あり。これ我が家なり。それより食を持ちて来たるべし。『ただ今、この子俄かに死せり。一人が食

問三

を持ちて来たれ』と告げてたぶべし」と云ふ。道人、「父子の別れは悲しかるべし。いかに歎なげきの色なき」と問ふに、答

5 へて云はく、「人の親子はわづかの契りなり。鳥の、夜林により居て、明くれば方々かたがたに飛び去るが如し。皆、業ごふに任せて

離れ、別るべし。何の歎なげきかあらむ」と。

指示内容

さて、かの家に行きて見れば、女人食物を持ちて、門に逢あふ。「いしかしか」と語れば、「さては」とて、一人が食をとどむ。家の内に老女あり。僧問ふ、「かの死せる人は、その御子か」と問ふ。「しかり」と答ふ。「など歎なげき給ふ気色なき」と問へば、「何をか歎なげくbべき。母子の契りは、渡りに船に乗りて行くが、岸に着きぬれば散り散りになるが如し。各々が業に任せて行くなり。驚くべきyにあらざ」と云ふ。

また、この女人に、「2この死せる人は、そこには何ぞ」と。答へて云はく、「わが男なり」と云ふ。「いかに歎なげきたる気色なき」と云へば、「何をか歎なげくべき。夫婦の習ひは、3市に人の行き会ひて、要事過ぎぬれば方々に散るが如し。添

問五

ひ果つべき習ひにあらざ」と言ひける時、この道人、「万法の因縁仮にして、執心あるcべからず。*在家の人の中にすら、4かかる心持ちあり」と、漸だん愧きの心発りて、諸法の因縁、*幻化虚妄げんかこまうの事を便りとして、すなはち、仏法を悟りzにけり

指示内容を押さえる

15 とぞ。

指示内容を押さえる

誠に、深き悟りまでは難くとも、無常転変の世、幻化虚妄の事、見ても知り、聞きも弁わかふべし。5誰か長生の齡よびに楽しみ、不死の薬を服せる。よくよく の道理を知りて、6常住の仏法を尋ぬべし。 (『沙石集』より)

注

* 道人⇨出家し、道を求める僧侶。 * 在家⇨俗世の家にいること、またその人。 * 幻化虚妄⇨幻のように実体がなく、事実でないこと。

問一 傍線 a ~ c の「べし(べき・べから)」の文法的意味として最適なものを選び、記号を記せ(同一記号の反復使用不可)。

ア 推量 イ 意志 ウ 可能 エ 当然 オ 命令 カ 適当

ア 推量 イ 意志 ウ 可能 エ 当然 オ 命令 カ 適当

問二 傍線 x ~ z の「に」を、それぞれ文法的に説明せよ。(9点)

問三 傍線 1 「しかしか」の指示する内容を、文脈に即して説明せよ。(6点)

問四 傍線 2・3 をわかりやすく口語訳せよ。(14点)

問五 傍線 4 「かかる心持ち」とはどのような気持ちか、簡潔に説明せよ。(6点)

問六 傍線 5 はどういふことを言っているのか、説明せよ。(6点)

問七 古典常識や古文の典型的な展開を踏まえて読む

問一 文脈から用法を識別する

問二 助詞・助動詞といった細部に注意する

問四 傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換える

問六 現代語訳問題以外でも、まずは傍線部を解釈する

問七

には、傍線6「常住」の対義語である漢字二字の語が入る。それを文中から抜き出して記せ。

(3点) …… 助詞・助動詞といった細部に注意する

出典

『沙石集』 卷八ノ四

『沙石集』は、鎌倉時代後期成立の仏教説話集。編者は無住。全十巻。

庶民を啓蒙するために、仏法の趣旨や処世術について口語体でわかりやすく記している。神仏の霊威や妙法、また人間の知の限界を説き、仏道に入る方法を論じる。庶民への啓蒙が主たる目的なので、わかりやすく笑い話のような説話も多い。

問題文は、人に年を問われて「六十余り」と答えたある老僧が、さらに「六十にいくつ余っているのか」と問われると「十四」だと答えたという、若く見られたい欲望が捨てがたいものであることを説いた笑い話の後に続く、教訓話である。

解答

問一 aア bエ cオ

問二 xナ行変格活用動詞「死ぬ」の連用形活用語尾

y 断定の助動詞「なり」の連用形

z 完了の助動詞「ぬ」の連用形

問三 山がつの息子が毒蛇にかまれて死んだので、食事は一人分だけ

届けてほしい(と父親が言っている)ということ。

問四 2 この死んだ人は、あなたにとってはどのような関係の人か

3 市場で人が偶然出会って、用事が済んでしまうと別々の方向

に別れていくようなものだ

問五 現世での人間関係にまったく執着を持たない気持ち。

問六 長生きすることを楽しみ、不死の薬を飲んだ者など、誰もいな

いということ。

問七 無常

解説

今回の文章の概要

問題文は、教養もないと思われる「山がつ」が、親子夫婦など、普通は強く愛情を感じるはずの相手の死に対してまったく執着心を持たず悟りきっているのがある道人が見て、自分も悟りを開いたという例話である。

現代人の感覚からすると、人と人との愛情が感じられず、あまりにもさっぱりしすぎているのではないかと感じてしまう話ではある。

だがここには、へ人が老・病・死を恐れてやまないのは、自身のかりその身や、家族・住居などに執心するためであり、人間の執着心には限りがないが、この世の生ははかないものであるという道理をわきまえ、執着を捨てるのが大切だ」という考えが基にある。

古典を読む際に、仏教に関する最低限の知識は、当時の人々の考え方を理解する上で必要である。今回は、この話のベースになっている(一切の因縁への執着を捨てよ」という仏教の教えを、古典常識として理解しておきたい。

〔発端〕道人(僧)が、山の中で山がつへ山に住む身分の低い人

の父子に会うが、子は毒蛇にかまれて死んでしまう。

〔父との問答〕父は僧に、〈食事が一人分不要になったと家族に伝

えてほしい〉と伝言を頼む。僧は父に〈どうして

悲しまないのか〉と問う。父は、〈親子の縁とは、

夜は一緒にいた鳥が、夜明けとともに別々に飛び

去るようなものだ〉と答える。

〔母との問答〕

僧は死んだ男の母に出会い、〈どうして悲しまない

のか〉と問う。母は、〈母子の縁とは、同じ渡り船

に乗ってはいても、岸に着けば散り散りになるよ

うなものだ〉と答える。

〔妻との問答〕

僧は死んだ男の妻に〈どうして悲しまないのか〉

と問う。妻は、〈夫婦の縁とは、市場で出会った人

が、用事が済めばそれぞれの方向に向かうような

ものだ〉と答える。

☑ 文脈から用法を識別できたか

問一 助動詞「べし」には多くの意味・用法があるので、区別には注

意を要する。「べし」の主な文法的意味は、「スイカトメテヨ」と暗記

するとよい。「ス」は推量、「イ」は意志、「カ」は可能、「ト」は当然、

「メ」は命令、「テ」は適当、「ヨ」は予定である。

「べし」の意味

推量 主語は普通三人称(または人間以外の事物)。〈きつと〉だ

ろう・〜に違いない〉と、同じ推量の助動詞「む」より必

然性の高い、確信をもった推量を表す。

意志 主語は普通一人称。〈〜しよう〉と自らの意志を表す。

可能 〈〜できる・〜できるだろう〉と可能または可能の推量を

表す。

*下に打消語を伴い、その打消語とあわせて、不可能の意

で用いられることが多い。

当然・命令 確信をもって(当然) 〈はずだ〉と強い判断を下す。

あるいは、〈〜せよ〉と相手に命令する。命令主語は普通

二人称。

*下に打消語を伴うと、その打消語とあわせて、禁止の意

になる。

適当 一般に〈〜のがよい〉と判断する。

*これを相手に向かって言うとき勧誘の意になる。

予定 〈〜ことになっている〉と予定を示す。

「べし」の意味の中心は当然の用法である。これを起点として、文

脈によって適切な意味の強弱を選択する。〈当然そうなるはずだ・そ

うするべきだ〉という強い判断を下せる場合には、当然、それを相手

(普通二人称)に向かつて言い聞かせる場合には、命令の意になる。当然ほど強くなく、一般的に〈そうなるのがよい・そうするべきだ〉

ということなら適当、これを相手(普通二人称)に向かつて言うとき

誘である。また、〈必ずそうすることになっている〉という事情を述べる場合には、**予定**の意になる。

また、他の人や事物について、確信をもって、〈きつとそうだろう。そうに違いない〉と考えるのは**推量**の意。主語は三人称、または事物となることが多い。主語が一人称の場合は、**意志**の意になる。

口語訳して〈〜できる〉の意になるものは**可能**である。可能は、下に打消語を伴って、その打消語とあわせて、**不可能**〈〜できない〉の意で用いられることが多いが、打消の語を伴うからといって、必ず可能の用法だと即断してはならない。「べし+打消語」の形になっている場合には、その打消語をとって「……べし」という文に戻した上で、文脈の中で意味を考えること。

それでは、以上のポイントを踏まえて、傍線部を確認する。

a 道人が畑にいる男性二人を見て、〈きつと親子だろう（親子に違いない）〉と考えた場面なので、文法的意味は**A「推量」**である。

b 傍線部を含む母親の発言の趣旨は、〈母と子の関係は仮のものだ〉というものである。よって、「何をか歎くべき」という強い判断と考えるべきだろうか、いや当然嘆くべきではない」という強い判断と考えるのが最も文脈に合う。**カ「適当」**では弱い。正解は**エ「当然」**。

c 「山がつ」の家族が、肉親との関係に少しも執着していない様子を見て、道人が「漸愧の心」とともに自分自身に言い聞かせた内容である。文脈から、「執心あるべからず」は〈執着する気持ちを持ってはならない〉という禁止の表現になる。禁止は命令の打消であるから、「べから（べし）」の意としては、ここでは**オ「命令」**が適切である。

☑ 助詞・助動詞といった細部に注意できたか

問二 「に」の用法を識別する問題である。

「に」の識別

① **格助詞「に」**——体言・活用語の連体形に付き、連用修飾語を作る。連体形に付く場合には、間に体言（「こと」「もの」など）が補える。

② **接続助詞「に」**——活用語の連体形に付き、文節と文節をつなぐ。〈〜ので・〜のに・〜すると〉などの意を表す。

③ **完了の助動詞「ぬ」の連用形**——活用語の連用形に付く。「き」「けり」「けむ」などの過去・完了系の助動詞を下に伴うことが多い。

④ **断定の助動詞「なり」の連用形**——体言・活用語の連体形、一部の副詞・助詞に付く。〈〜である〉の意を表す。下にラ変動詞「あり」（またはその丁寧語「侍り」「候ふ」など）を伴うことが多い。また、「にて」の形で文中止する用例も多い。

⑤ **ナリ活用形容動詞の連用形活用語尾**——直前に、形容動詞の語幹となる状態を示す語がある（語幹部分は名詞として自立できない）。

⑥ **ナ変動詞の連用形活用語尾**——「死に」「往（い）（去）に」の二語のみ。

⑦ **副詞の一部**——活用せず、上接部分と切り離せない。

①②および④は、いずれも連体形に接続するので、識別の際には注意が必要である。

助詞(①②)と助動詞(④)との識別に迷った時は、日本語の述部の語順は〈動詞↓助動詞↓助詞〉で、助動詞と助詞の順序が逆になることはない、という基本的な知識が役立つことも多い。これは覚えておきたいポイント。

それでは、順に傍線部を確認する。

x 「死に」で一語。ナ変動詞「死ぬ」の連用形活用語尾。

y 推量(当然)の助動詞「べし」の連体形「べき」に接続している。また、直後にラ変動詞「あり」の未然形「あら」があり「に+あり」の形になっているので、これは断定の助動詞「なり」の連用形。

z ラ行四段活用動詞「悟る」の連用形「悟り」に接続している。よって、完了の助動詞「ぬ」の連用形。直後に過去の助動詞「けり」があることも確認のポイント。

☑ 指示内容を押さえられたか

問三 ここは、傍線1の前後の文脈を確認する必要がある。

まず、「山がつ」の息子が毒蛇に噛まれて死んだため、父親は通りすがりの「道人」に向かつて、〈家の者が食事を持ってくることになっているが、「一人分を持ってくるように」と告げてくれ〉と言った。

そこで、「道人」が「女人」に「しかしか」(傍線1)のことを伝える。

すると、「女人」は家の中に一人分の食事をとどめ置いた。

以上より、ここで「道人」が告げた内容としては、

① 「山がつ」の息子が死んだこと
② 食事を届けるのは一人分でよいこと

の二点が考えられる。

☑ 傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換えられたか

問四 2傍線部は「ここの／死せ／る／人／は、／そこ／に／は／何／ぞ」と分解できる。

「死せ」はサ行変格活用動詞「死す」の未然形。

「る」は「人」という体言に続いているので、完了の助動詞「り」の連体形。完了の助動詞「り」は、サ行変格活用の未然形と四段活用の已然形(命令形)に接続する。

「そこ」には、場所・事物を指す中称の代名詞〈そこ・それ〉、対称(二人称)の代名詞で〈あなた〉、の二通りの用法があるが、ここでは、会話の相手と「死せる人」との関係を探っているのだから、後者で、〈あなた〉の意となる。

「何」は不定称の指示代名詞で、実体のわからないものを指し、〈なもの・なにごと〉の意で用いる。

「ぞ」は強意の係助詞。

以上を合わせると、〈この死んだ人は、あなたにとってはどのような関係の人か〉と尋ねているのだと理解できる。

なお、これに対する女人の答は、「わが男なり(＝私の夫だ)」である。最初のほうの「父子」(れ1)、「その子」(れ2)では、「子」の年齢が不明だが、「老女」(れ8)が「その子」の母であり、またここで「女人」が「その子」の妻だとわかるので、「その子」は成人した

男子であると思われる。登場人物の人間関係を正確に押さえない。

3 傍線部は「市／に／人／の／行き会ひ／て、／要事／過ぎ／ぬれ／ば／方々／に／散る／が／如し」と分解できる。

「市」は「市場」の意。

「人の」の「の」は、ここでは格助詞「の」の主格の用法で、「〜が」と訳す。

「行き会ひ」は「(行つて) 出会う」意のハ行四段活用の複合動詞「行き会ふ」の連用形。

「要事」は「用事」の意。

「過ぎ」は、「過ぎる・終わる・済む」といった意のガ行上二段活用の動詞「過ぐ」の連用形。

「ぬれ」は完了の助動詞「ぬ」の已然形。

「ば」は接続助詞。已然形に接続する「ば」は、順接の確定条件であるが、ここでは偶然的条件の「〜すると」の訳が文脈に合う。

「方々」は「あちらこちら」の意。

最後の「如し」は「〜ようだ」という比況の助動詞。

全体を合わせると、「市場で人が出て、用事が済んでしまうと別々の方向に別れていくようなものだ」といった訳ができる。夫婦の関係とはそのようなりそめのものである、と言っているのである。

☑ 指示内容を押さえたか

問五 傍線部の「かかる」は「かくある(=こうある)」が縮まった形の連体詞。「このような」と解釈すればよい。「かかる」が指示する内容は、これより前で述べられている。

傍線4の前で言及される「在家の人」とは、「山がつ」の家族を指す。

この「山がつ」の家族は、父母は息子が亡くなくても嘆くことなく、その死を淡々と受け入れ、妻も夫の死を淡々と受け入れている。たとえ家族であっても、現世における人の縁ははかなく仮のものであると考え、それに少しもとらわれていない。人の縁に対して「執心」がないのである。

以上の点から、「かかる心持ち」とは、「現世での人間関係にまつた執着を持たない気持ち」などと解答できる。

☑ 現代語訳問題以外でも、まずは傍線部を解釈できたか

☑ 助詞・助動詞といった細部に注意できたか

問六 傍線部は、「誰／か／長生／の／齡／に／樂しみ、／不死／の／藥／を／服せ／る」と分解できる。ここは「山がつ」と「道人」のエピソードを通して、「一切の執着を捨てよ」という仏教の教えを提示するまとめの部分であることをまず押さえない。

「誰か」の「か」は、疑問・反語の係助詞。

「長生の齡」は、「長寿・長命であること」。

「不死の藥」は「死なない藥」だが、このままの形でもよい。

「服せ」はサ行変格活用動詞「服す」の未然形。

「る」は完了の助動詞「り」の連体形。係助詞「か」があるので、係り結びの法則により、文末が連体形で結ばれている。

「不死の藥」を飲んだ人は実際にはいないので、この一文は、「誰が長生きすることを楽しみ、不死の藥を飲んだらうか、いやいや」と反語で解釈する。

ここは説明問題だが、まずは文法的事項がきちんと押さえられていることを採点者にアピールし、さらに口語訳を示すだけでなく、反語⇨否定であることを明確に説明することが大切である。

☑ 古典常識や古文の典型的な展開を踏まえて読めたか

問七 傍線6「常住」は〈生滅変化せず、永遠に存在すること〉である。ここは「常住の仏法」とあり、「仏法」を修飾している。人間の生死などの現世での因縁は永遠ではないが、仏法は「常住」なのである。問題文中からこの対義語となる仏教的な言葉を探せばよい。〈永遠でないこと⇨常ではないこと〉と考えられれば、16にある「無常」が、「常住」の対義語として見つかるはずである。

全訳

昔、仏法を求める修行者がいた。ある山の中を歩いていたところ、二人の山人で、(そのうち)一人は畑を耕すものがある。きつと親子aだろう。これを見ていると、その子どもの方が、毒蛇に噛まれて急に死んでしまった。父は嘆く様子もなく、この修行者に語って言うには、「あなたがいらつしやる道のそばに家がある。それが私の家だ。そこから食事を持つてくることになっている。『たつた今、この子が急に死んでしまった。一人分の食事を持つてくるように』と伝えてください」と言う。修行者は、「父子の死別は悲しいはずだ。どうして嘆かないのか」と尋ねると、(山人の父が)答えて言うには、「人の親子はわずかな縁である。鳥が、夜は林にいて、朝になると別々の方向に飛び去るようなものだ。皆、業(⇨前世での行いが原因となって現

世で受ける報い)に従って離れ、別れるのだろう。何の嘆きがあるうか(いやない)」と。

さて、その家に行つてみると、女が食べ物を持つており、(その女に)門で出会う。「1これこれです」と話したところ、「それでは」と、一人分の食事をとどめ置いた。家の中に老女がいる。僧が、「あの死んだ人は、あなたの御子か」と尋ねる。(老女は)「そうだ」と答える。「なぜお嘆きになる様子がないのか」と尋ねると、「何を嘆くbべきだろうか(いやない)。母子の縁は、(川を)渡るのに船に乗って行ったところ、岸に着いたら別れ別れになるようなものだ。それぞれが業に従つて行くのである。驚くべきことではない」と言う。

また、この(門で出会った)女に、「2この死んだ人は、あなたにとつてはどのような関係の人か」と(尋ねる)。(するとその女が)答えて言うには、「私の夫だ」と言う。「どうして嘆いている様子がないのか」と尋ねると、「何を嘆くべきだろうか(いやない)。夫婦の仲は、3市場で人が偶然出会つて、用事が済んでしまつと別々の方向に別れていくようなものだ。ずっと一緒にいられるものではない」と言ったとき、この修行僧は、「一切の因縁は仮のものであり、執着する気持ちを持つてはcならない。出家していない人の中にさえも、4このような気持ちを持つ人がいる」と、恥じる気持ちが生じて、諸法の因縁は、幻化虚妄(⇨一切の事象には実体がなく事実でないこと)であるということをやすがとして、そこで仏法の悟りを開いたということだ。本当に、深い悟りを開くのは難しいとしても、無常転変(⇨常に変化し続ける)の(この)世が、幻化虚妄であることを、見て知り、また聞いてわきまえなければならぬ。5 誰が長生きすることを楽しみ、

不死の薬を飲んだらどうか（いや、いない）。（だから）よくよく無常の道理を知って、6 永遠である仏法を求めなければならぬ。

まとめ

- ・ 文脈から用法を識別する
- ・ 助詞・助動詞といった細部に注意する
- ・ 指示内容を押さえる
- ・ 傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換える
- ・ 現代語訳問題以外でも、まずは傍線部を解釈する
- ・ 古典常識や古文の典型的な展開を踏まえて読む